

日本の労働問題を

考へその問題の部分的な解決過程として起る労働争議を考へるについて先づその對照である。我が國の産業状態を考へねばならぬ。事漸しく言ふまでもなく日本は自然天然の方面から見て原料産業に依つて立國するは困難な國である土地狭く、地味は瘦せ、地下に鑛物石炭なく、天然自然の富力に於て甚だ缺乏してゐることは何人も認め得る處であらう。この天然的な不利益は幾分人爲的な努力に依つて補助し得られるも亞米利加や獨乙や露西亞の如く原料産業に依つて立國することは到底如何に人爲的な努力を費しても不可能な事である。

然らば我が國

の産業の中心は何に依つて補足し國途の進展を計るべきか、それは即ち、國内(の産業(工業)に全力を傾倒して自力を持つて國民を養ふに足るべき根本的な産業中心の國策を樹立し年々増加する人口をこの工業に消化し以て、低廉な原料を求め、之を加し生産品の賣上を以て更に原料又は食料を輸入するより以外に我が國の伸長と發展は望むことは出来ない。

然るにこの國運の盛衰に掛る鑛、工業は今や全く行詰り、前途に幾多の障害や暗影が横つて居る。即ち個人主義的營利生産を目的として歐洲大戰に依つて急激に發達した我が國の手工業的粗工業は、

工業としての準備、組織、大規模の時代に入らんとする時世界大戰は終末を告げ、所謂不況時代に入るや、歐米の大量生産に依る精巧なる生産品の爲に海外市場より驅逐され年々輸入の超過の状態を持續するに至り、紡績工業を第一聲に我が國の産業は不況行詰のどん底に、呻吟してゐる次第である。

この行詰りを打開し、この暗影を乗り切る方法は、そは大なる資本と、優秀なる技術を有する、労働者をも以て大量生産をなすか、又精密なる工業への生産革命を斷行するに非ざれば、斷じてこの經濟界の行詰りを打開し産業立國を樹立することは不可能である。されば在來の單なる個人主義的眼前利慾に促れず、永久的な産業の發達の基礎を築くことが現在我が國に於ては最も必要な事である。それには先づ小資本より大資本へと資本の集中を行ひ機械原料等の固定資本はこの財力に依て解決は出来るに信ず。他方優秀なる技術と熟練精巧なる手腕を有する労働者の優遇策、即ち生活の安定を保證し以て、生産品の優良と生産能率の増加に依つて輸入品に對抗すると同時に外國市場にその生産品の聲價を發揮さすべきであるまいか、あへて一考を乞ふものである。

三、今回の争議の原因及經過